

(3) 昭和五十一年九月一日、講談社刊

(4) 「神社裏」という表現は、「団欒」にはでてこない。また、『昭和文学全集 第二三巻』（昭和六二年九月、小学館刊）所収の三浦哲郎自身の編による年譜では、「団欒」執筆時と考えられる時期の住居は、「都内練馬区高松町二丁目三三四三番地」であるが、ここは実際には、八幡神社（現在の高松一丁目一六番一号）の参道に類した神社の正面に向かう道に沿っている。したがって、今は無くなってしまうが、現実にはアパートは、神社裏ではなく、神社の表側に建っていたことになる。

また、その行き帰りを楽しんだという銭湯は、アパートのあった辺りからゆつくり歩いても十分程のところにある「宏明泉」と考えられる。こちらは今も営業しているが、「野のむこうに見えた」という煙突は、相当近づかなければみられない。

(5) この二つの短篇に登場した「子供に怪我をさせた事件」は、実際に起こったことであった。「小説現代」（昭和三九年七月）の「作家夫人訪問」という十返千鶴子氏のインタビュー記事において、三浦哲郎の妻、徳子夫人は、この事件についてつぎのように話しておられる。以下原文を引用する。

「ああ、そのお話ね、仕事をすませた後で主人はビールを二本ほど飲んで、三人でお風呂屋さんにゆく途中だったんです。そうして主人が子供の手をとって、スキップで畠の中の道を、ぴよんぴよん飛び歩いているうちに、子供と重なるようにして転んでしまったんです。あのときはほんとうに、びっくりしました。」

幸いお子さんは、足の捻挫だけで大したことはなかったようですが、そのときは一瞬、お子さんの目は大きく見ひらきっぱなしで泣き声もたてず、お二人はゾツとして身のすくむ思いだったそうである。

また、「石段」で扱われた、ブルドッグが石段を転がり落ちる話は、

「夜話」（『文学界』昭和五十九年一月、のち、『愁月記』一九八九年十二月、新潮社刊に収録）に、

飼犬というのは雄のブルドッグで、肩幅広く、胸厚く、散歩の途中、丘の上の神社の境内を暴走していつてそのまま石段の下まで転落しても、けろりとして、石畳を転げていったついでに鳥居の根元へちよつと片肢を上げて見せたりするほどの、まるで綱のような体軀と図太い神経の持主だったが、六歳と二ヶ月でフィラリアにやられた。

と、描かれてもいる。

説の終息部分に、初出と初版では異同がみられるのである。

彼は歩き出しながら、さつきカポネがあんなに勢いよく駆け
てきたのは、きつと自分の姿が境内から急にみえなくなったか
らだと思った。すると、ひとりで十年前の夏の日のことが思
い出された。けれども、彼の方も、日頃鈍重なカポネが突然あ
んなに狂奔するとは全く予想もなかったのだ。

二人は、黙ってまたいつものコースを歩きはじめた。「石段」、
傍点引用者)

彼は歩き出しながら、さつきカポネがあんなに勢いよく駆け
てきたのは、きつと自分の姿が境内から急にみえなくなったか
らだと思った。けれども、彼の方でも、日頃鈍重なカポネが突
然あんなに狂奔するとは、全く予想もなかったのだ。

彼は、ふと石段の方を振り返ってみた。その石段の途中に、
誰かがしよんぼりと腰を下ろしているような気がしたからであ
る。けれども、そこには誰もいなかった。危いところだったな、
と彼は思った。

二人は、黙ってまたいつものコースを歩いていった。「石段」、
傍点引用者)

『石段』では、十年前の事件を思い出し、そして妻からも子供か
らもとどろり残され、悄然と石段に腰を下ろした男が再確認されて、よ

り強調されることになった。そしてそのことが、小説の時空をさら
に深めることにつながった。

「団欒」と『石段』の間には、十三年の歳月が過ぎている。初め
て子供をもった、安普請の神社裏の⁽⁴⁾アパートに住む二十代の父親が、
高校生の長女を頭に三人の娘の親となり、すっかり太って、今はブ
ルドッグを飼うことのできる家に住んでいるのである。

身辺の⁽⁵⁾できごとを小説世界に研ぎ出ししているとすれば、作者
三浦哲郎自身にとっても、家族にとっても、この期間はとても大き
い。子供を育てることに余裕も生まれ、また当然子供たちも自立し
はじめていくわけで、家族というものの捉え方に変化が生じたと思
えられるのではないだろうか。

『石段』では、家族の一人ひとりが、個々に独立し、たちあがっ
くる。

「団欒」は、家族の主たる父親として、そのあかしでもあるか
のように、団欒をひたすら求めながらも得られず、「わたしたちは、
何度でも、いま、ここから、出直すほかはないのです。」と祈りを
繰り返す男が主人公であった。『石段』では、家族の一員であり父
親でありながら、ここに描かれるのは、ひとりの男の個人としての
自画像なのである。自分を個と捉え、みつめている男なのである。

注

(1) () 内の数字は「群像」における掲載頁数である。

(2) 「イチニのサンで空中ぶらんこ——三浦哲郎「石段」瞥見——」

〔月刊国語教育〕平成三年五月、十一卷三号

感じた。危険を予感して、急に足をゆるめようとした。

石段——不意に遊びの途中で、吊り上げた子供の腕が肩から抜けやしないか、という不安が頭をかすめた。

〈倒れたとき、飛んできて子供を抱きあげた妻の言動と主人公〉

団欒——妻はふりむくと、まるで他人をみるような目で、わたしを凝視した。刺すようにつめたい、仮借ない目の色だった。急に泣くように顔をしかめ「いいのよ」と叫ぶようにいい、子供を奪われまいとするかのように、道ばたの麦畑の中に踊り込んでいった。わたしは、麦畑の中で子供の尻を叩きながら、くるくるまわっている母親を黙ってみていた。

石段——妻は胸に子供をしつかり抱いて目を閉じたまま、低い力力の籠もった声で、「なんてことをあなたは……。」「といい、それから初めて刺すような目で彼をみた。「お医者へいつてきます。そこから待っててください。」という妻の言葉に、立ち竦んだようになっっていた。

〈子供の怪我の状態〉

団欒——当初、右足首の捻挫と左わき腹のすり傷だけだと思っていたが、後にした精密検査で、足の骨にヒビが入っていることがわかった。

石段——さいわいくるぶしの骨に鱗ひびが入っただけで済んだ。

〈事件後の主人公〉

団欒——最寄りの医者へ妻と駆けつけた。

石段——神社の石段の途中に腰を下ろして、長いことじっとしてい

た。妻と子供はなかなか戻ってこなかった。

これらの相違を詳細にみてみると、同じ事件を扱いながら、主人公の描かれ方が大きく変わっていることがわかる。

「団欒」の「わたし」は、家族における父親という役割を果たす存在として、その面が強調されているのである。それは、子供の誕生日という、いわば家族の記念日に起こったことであること、事件後わたしを拒絶した妻を母親と表現していること、そして何よりも、一緒に医者へ駆けつけていることなどに表われている。

これに対し「石段」の「彼」は、事件後とり残されて「転んだ自分が、情けなかった。ただ子供を喜ばせたいばかりにしたことなのに、どうしてこんなことになったのだろう。」と、神社の石段に腰を下ろして、自省するひとりの男として描かれている。

父親としての男から、ひとりの男へとそのあり方が変化しているのである。

V

そして、この傾向は、『拳銃と十五の短篇』が出版されたとき、さらに強められることになった。以下、「群像」における初出を「石段」、『拳銃と十五の短篇』所載の初版を『石段』と表記する。

「石段」でブルドッグが子供をつなげたまま、石段を転がり落ちた後、子供に異常がないので散歩をつづけることになった。その小

まいか。

確かに、「団欒」から「石段」へ受け継がれたものは、「生の危機感」であり、「石段」では、一層研ぎ澄まされて描出されている。

III

しかし、それぞれの作品の主人公、「団欒」における「わたし」と、「石段」における「彼」に焦点を合わせて読むと、別の側面がみえてくるのではないだろうか。

ここで、「団欒」での「子供に怪我をさせる事件」と、「石段」における十年前のその違いをみてゆきたい。

〈日時〉

団欒——子供（桃枝）の三歳の誕生日の黄昏時で、刈り入れ前の麦が、青々としている時期。

石段——夏のひどく暑かったある日の暮れ方。

〈事件のあった場所〉

団欒——麦畑の中のアスファルト道路

石段——神社の石段の下にある鳥居の前を通っているアスファルト

の道

〈子供〉

団欒——三歳になったばかりの桃枝。

石段——四つになる女の子

〈事件の前の主人公〉

団欒——子供の誕生日にあやかっつて、晩酌のビールを二本飲む。

石段——外出先で昼酒を飲んで帰宅し、またビールを飲む。

〈宙ぶらりんの遊びのよび方〉

団欒——イチニのサン

石段——あれ

〈はじめの遊び〉

団欒——わたしと子供は手をつなぎ、わたしはスキップを踏むが、子どもは笑いながら走り幅跳のように前へ跳ぶ。

石段——身重の妻を促して、両側から子供の手をとってやり、あれを何度もする。

〈遊びがエスカレートした理由〉

団欒——子供は、両手でわたしの手にすがりつき、ぶらさがってしまつた。わたしは、子供の笑い声に煽られて、地面すれすれの低空飛行をさせながら、次第に走る速度が早くなった。

石段——外出先で何があつたか、いつになく気持ちが弾んでいた。

自分の方が、あれだけでは物足らず、ひとりで子供の手を引いて駆け出した。スピードが上がつたが、酒を飲んでいることと、自分の齢を忘れてしまつた。

〈危険の予感〉

団欒——「あぶないわよ」という妻の声を聞いたような気がしたが、知らず知らず駆けける足を早めていた。ふと、子供を完全に宙吊りにしたまま、俺はこんなに走ってもいいものだろうかと不安を

十年前の夏のある日、彼は外出先で昼酒を飲み、アパートへ帰宅してさらにビールを飲んだ。酔いが戻ってきて、散歩がてらに銭湯へいこうといい出し、妻と四つになる女の子を伴い、出かけた。途中で子供が「あれ」をせがんだ。「あれ」とは、手を繋いで歩きながら、両親に両側から吊り上げてもらい、束の間の宙ぶらりんを楽しむ遊びである。いつになく気持ちの弾んでいた彼は、あれだけでは物足らなくなり、ひとりで子供の手を引き駆け出していった。子供の笑い声に煽られて、一層スピードがあがった。不意に、子供の腕が肩から抜けはしないかと不安が頭をかすめた。その途端、脚が縄れ前のめりに倒れ、仰向けになっている子供の上に斜めにのしかかってしまった。駆け寄ってきた妻が子供を抱きあげ、名を呼びながら尻を平手でつづけざまに打った。子供が堰を切ったように泣き声をあげ、彼はわれに返った。妻は、子供と医者へいつてくるからそこらで待っててください、とい置いて小走りですわってしまった。ひとりになった彼は、暗い気持ちで神社の石段の途中に腰を下ろして、長いことじっとしていた。

そんなことを思い出したのは、今から半月ほど前のことである。子供が二人増え、女の子ばかり三人になったが、このときは小学二年生の子とブルドッグの散歩をしていた。神社の境内で、子供に犬の綱を渡してやり、彼は石段の方へ戻って降りかけた。子供と犬が遅いので、上の境内に声をかけて石段を昇りかけた。すると、突然、犬が綱の端を握ったままの子供を引きづるようにして駆け

きて、石段の上から転がり落ちた。子供は宙を飛んで、石段を転げてゆき最下段にちよこんと腰をおろして止まった。幸い怪我は膝を少しすった程度だった。身体のどこにも異常がないのを確認して、これも無事だったと犬とともに、散歩をつづけることになった。彼は、再び歩き出したとき、ひとりで十年前の夏のことを思い出したのだった。

「石段」では、作中時点の半月前と十年前に起った共通のできごと、つまり自分の不注意から子供に怪我をさせる（させそうになる）事件を重ね合わせ、日常生活において不意に突きつけられる、命の危うさを描き出している。

この点について、寺横武夫氏は「団欒」と「石段」とを比較して、次のように述べておられる。⁽²⁾

三浦文学の原風景を、生の危機感という一点に絞り込みつつ、一筆書きで仕上げようと企んだのが「石段」だったということになるのではあるまいか。

むろん、そのように描ききるには、「団欒」のもつ物語性をまず削ぎ落とさねばならなかったに相違ない。空中ぶらんこひとつの事件に凝縮する必要があるはずだ。作品世界を客観化する途も探索されたとみてよい。語り手の「わたし」を、「彼」に変身させる考え方だ。主題の強化を図るべしという声も最後まで無視できなかっただろう。ブルドッグの一件を加入させることよって、テーマの進展を補う方法が考えられたとはいえ

文が、散りばめられている。例えば、

わたしは、子供があるきまわるようになってから、妻の監督ぶりがどうもぞんざいなような気がしてなりません。妻はおそらく母親の勘のようなもので、自信たっぷり子供を扱っているようですが、それでもはたからみれば実にあぶなつかしくて、はらはらして見ておれないようなことがしばしばです。もつと気をつけてほしいと思います。どんなちいさな不注意が、子供の生涯を台なしにしてしまうか、わからないのです。(7)¹

「運がいいのと悪いのとは、ほんのちつとのちがいのねえ。」
といいます。

「世のなかのことは、紙一重だよ。」
わたしがそういうと、妻はそれきり黙って子供の口に箸をはこんでいましたが、よほどしてから、
「こわいみたい。」

ぼつんと、そういいました。(8)

「あぶなかつたわ。」

と妻はいいました。

「あなただったら、方向オンチなんだから。どこへつれていかれるか、わかりやしないわ。」(11)

——もうよほどあるいてから、わたしはふと、靴で踏んでいる枕木の音が急に変わったことに気がつきました。それまで固く、冴えていた枕木の音が、急に曇って、どこかへ反響するようです。わたしは不審に思って、足もとに目を落してみました。すると、枕木の下に、地面ではなく、星空を映している黒い水面がみえたのです。

わたしは、なにも知らずに、枕木の橋をわたっていたのです。気がつかなければ、そのままわたってしまったでしょう。けれども、わたしはとたんに足が棒のようになって、枕木の一本に立ちすくんでしまいました。(19)

という具合である。これらにより、主人公わたしの悲壮な思い「わたしたちは、何度でも、いま、ここから、出直すほかはないのです。」が、一層強く読者に迫ってくるのである。

II

「石段」は「団欒」の十二年後、「群像」に連載されていた「短篇連作 拳銃と十五の短篇」の第六作として発表された。

「石段」では、主人公は「彼」と表現されているが、冒頭は、「団欒」で描かれていた「子供を怪我させた事件」の回想場面である。あの事件から十年がたっている。

回想の内容は以下のようである。

の背中が、冷や汗でもかいていたのか台の革にくっついていて、手足を上げられるたびに、パリッパリッと音をたてたのが、忘れられない。妻がわたしを、他人をみるような目つきでみたのは、二度目なのを思い出す。一度目は、桃枝を出産したときであった。その夜、わたしは酒場で酔っぱらっていて、朝帰りをした。産室に入ると、眠っていると思っていた妻が目を開いたが、それは赤の他人をみるような目であった。妻は、結婚前の中岡のことを手紙に書いたのは、最初にあなたに子供をみてもらいたかつたからだ、と泣き出した。手紙をもらったときわたしは、妻に会い、これまでよりも一層身近な存在になっているのに気がついた。しかし、妻の身におこったことを忘れることができず、ときおり怒気につかれ、妻にあたるようになった。だが、自分の手では殴ることができなかった。

(九) 子供の足の怪我は、捻挫ではなく骨にひびが入っていた。もう少し放っておいたら、一生足をひきずるようになっていたところであった。怪我は秋口に全快し、お祝いのもりで、一家で上州へ二泊の温泉旅行をした。帰宅の二日後、妻はK病院に流産の危険があつて入院した。その間、桃枝と二人の生活になるが、わたしは縫りをもどすいい機会になるかもしれないと思う。妻を見舞って病室から帰ろうとすると、妻が尿意を催し、ベッドで用を足すことになる。その蒲団にこもった音をベッドの下で聞きながら、新婚の冬、妻の実家において、障子の蔭で妻の小用の音を聞いたことを思い出した。「せめて、あのころまで立ち帰ることができたら」「そして、あのころから出直すことができたら」と祈りたくなった。けれども、

わたしたちは、何度でも、いま、ここから出直すほかはない。わたしは妻の音がすむまで、寝台の下の暗がりを見つめていた。

小論で取りあげるエピソードは第七章と第八章に描かれている。

「団欒」の主人公わたしは、運送会社に勤めるサラリーマンで、妻と三歳の女の子と暮らしている。四畳半ひと間の間借り生活から、専用の台所がついたふた間の新築アパートへ転居し、家族三人水入らずの生活がはじまるはずであった。ところが、そこは壁がベニヤでできた部屋で、息を殺しながらの生活を余儀なくされてしまう。そんな家族のささやかな楽しみが、銭湯への往き帰りである。貴重な団欒のひとつである。

その一番大事にしている時間に、娘に不注意から怪我をさせてしまったのである。その父親としてのわたしが原因で壊れてしまった親子関係を、妻の流産未遂入院をきっかけにして、修復できるかもしれないと思う場面に、「わたし」の危なっかしさが集約されている。

「団欒」には、「エミと中年アメリカ人男性」、「学生時代の友人樋口と同棲相手の友人である小学教師」、「妻房子と中岡」の三つの暗い性的関係や、妻の初出産に立ち合わず朝帰りした「わたし」など、およそ団欒とは縁遠い挿話が語られる中で、一家の主として、平和な家族の象徴である団欒というものを追い求める男が描かれている。作中には、家族の幸せをひたすら求める主人公のまわりどころがついている、不幸な（あるいは不運な）事件を暗示するかのよう

二人はしばらくラジオをつけっぱなしにして陽気にふざけまわる。そして、男が帰った後、エミはいつも独り言をいっていた。ある日わたしは、その様子をみてしまい、祈りの姿に似ていると思うが、それ以来、エミの祈り声をきくと、うたた寝から覚めたような気持ちになるようになった。

(五) 引越しの後しばらくして、学生時代の友人小池に誘われ飲み屋に行くが、その女は、学生仲間の樋口と同棲しわかれた相手であった。同棲して一年たったとき、わたしと小池は樋口に招かれ、彼女の友人達と飲んで、雑魚寝をするようになった。翌朝、わたしは樋口から、彼女の幼友達の小学校教師と関係をもった、と聞かされる。それから一週間後、樋口と今は飲み屋の女将になった同棲相手は、わかれることになった。

(六) この章も、(五)と同じく過去のできごとが語られる。初出産を控え、わたしの郷里に帰っていた妻から送ってきた長い手紙についてである。「おゆるしください」と書き出された手紙には、妻がわたしと知り合う前に、中岡という男と陰気な肉体関係をもったことが綴られていた。手紙は「おゆるしください。信じてください。そしてお忘れください」と結ばれていた。この章では、妻を、房子と本名で呼んでいる。

(七) 子供(桃枝)の三歳の誕生日がやってきた。子供の好物を並べた食卓を囲み、わたしはあやかっぺビールを二本飲んだ。忽ち酔っ払ってしまったが、「みんなで風呂へいこう」といい出す。妻は、わたしの酔いを気にながらも支度をし、三人ででかけた。子供

は、誕生日プレゼントの人形を抱えている。銭湯への往復路は、ベニヤ板の壁に囲まれた部屋に住むわたし達にとって、他人の耳を気にせずにすむ貴重な団欒のひとつであった。刈入れ前の青々とした麦畑の中の道になると、いつもは、その道で両親に手をとってもらい、空中ブランコを楽しむ子供は、今日は人形を持っていくからそれはできない、と母親にいわれ不満気である。そのときわたしは、いつかみた若者たちの楽しいなフォークダンスの光景を思い出し、「プロムナードで帰りましょ」という言葉が頭にうかんだ。わたしは「プロムナードで帰りましょ、しよう」と子供をさそい、万事略式と手をとってスキップを踏んでみせた。妻は声をあげて笑い、子供もぴよんぴよんと跳ねだす。子供は、まだスキップができないので、走り幅跳びのように前へ跳ぶ。そのうちに、両手でわたしの片手にぶらさがってしまった子供に低空飛行をさせたまま、わたしは駆け出していた。危険は予感したが、もつれ合っところんでしまう。下敷きになった子供の目が大きく見開かれた。身を起こしたところへ妻が飛んできて、子供を抱き上げ、声を出さない子供の尻を打ちながら、名前をよびつづける。ゾットとして駆け寄ったわたしを、妻は他人をみるように凝視して、「いいのよ」と叫ぶようにいい、道ばたの麦畑の中に踊りこんでいった。わたしは、「いいのよ」の意味を考えながら、畑の中で子供の尻を叩きながら、くるくるまわっている母親をみていた。

(八) 医者に駆けつけ診てもらおうと、子供の怪我は右足首の捻挫と、左脇腹のすり傷だけであった。わたしは、診察台にのせられた子供

三浦哲郎研究

—「団欒」から「石段」へ—

近藤洋子

三浦哲郎の短篇小説「団欒」(「新潮」昭和三十八年四月)には、主人公のわたし、妻、三歳になる子供の桃枝が登場するが、父親である「わたし」が子供に怪我をさせてしまうエピソードが描かれている。この素材が、十二年後に発表される「石段」(「群像」昭和五十年六月)に引きつがれている。

小論では、その改作意図を考察し、小説がどのように変わったのかをみてゆきたい。

I

「団欒」は九つの章から成っており、およそのあらすじは以下のようである。

(一) 妻が、新築で四畳半と三畳にお勝手がつき、家賃五千五百円、権利金敷金無しという掘出しものアパートをみつけ、勤め先のわたしに連絡をしてくる。寄り道もせず帰宅したわたしに、妻は、

子供と出かけた先で偶然みつけた次第を話す。

(二) 夕食を済ませて、わたし、妻、子供の三人で、新しい部屋をみに出かける。家主の菓子屋の棟つづきで、裏へ四部屋つながった長屋のアパートである。奥から二つ目のところを借りることに決め、帰ろうとすると、家主の細君に、道を間違えていることを教えられる。

(三) 翌日、引越しをする。新しい住まいに帰宅したわたしは、コートを掛けるところをつくろうとして、壁がベニヤ板であることを発見する。妻は、絶望的な表情で部屋中の壁をハタキの柄で叩きまわり、点検する。子供もまねをして、両手で壁を叩きはじめるが、その度に、ぼろんぼろんと音がする。こうして新しい住宅の生活がはじまった。

(四) 空いていた他の三部屋も次々と塞さがり、わたし達の隣室四号室には、ひとり暮らしのエミという女が入った。エミのところには、毎週月曜と金曜の夕方、中年のアメリカ人の男が通ってくる。